

L02a

2014年ほうおう座流星群のアメリカ東海岸での光学観測

藤原康德 (総研大, 極地研, 日本流星研究会), 植原敏, 嵯峨山亨, 木下正雄 (日本流星研究会), 戸田博之 (国立天文台岡山), 渡部潤一 (国立天文台), 佐藤幹哉 (かわさき宙と緑の科学館), 土屋智恵 (放送大), 戸田雅之, 佐藤智子 (日本流星研究会), NHK コズミックフロント取材班

ほうおう座流星群は、1956年12月に一度だけ突発的な大出現が観測され、それ以降活発な流星群活動の観測報告はなかった。また、親天体と考えられていたBlanpain彗星も、1819年に発見された後は行方不明となっていたが、2003年に発見された小惑星2003WY25がBlanpain彗星と同定され、彗星の軌道が確定した。これにより、モデル粒子によるダストトレイルからの流星群の出現検証、予報が可能となり、1956年の大出現とその後の不出現の状況が、モデル計算により確認された (Watanabe et al. 2005)。また、モデル計算からは、2014年12月1日から2日にかけてこの流星群が出現する可能性があることが示された (Sato & Watanabe 2010)。

我々は、予報された極大が12月2日00時UT前後であったため、光学観測が可能なアメリカ東部ノースカロライナ州で観測を行った。デジタルカメラ2台、ビデオカメラ8台を用いて予想極大を含む約4.5時間観測を実施した。観測結果からは、ほうおう座流星群の活動自体は認められたが、明確なピークを伴った大出現はなかった。本講演では、ほうおう座流星群の活動状況と観測された輻射点位置について発表する。